研究発表　分科会 5-2　身体と社会 10 月 15 日（日）16：25-17：05　第一校舎 121

ナンシーにおける「分有」の概念と情動的主体としての衣服

東京工業大学　安齋 詩歩子

衣服研究にはこれまで、衣服を「皮膚」と見立てる近代以後の伝統的思想があった。その思想は大別すると二つに分けることができる。一つは衣服を皮膚の拡張とする「身体補綴」の考え方であり、もう一つは衣服を現象学的皮膚とみなし、「身体像」を補強すると考えるものである。しかしながら問題は、これらの思想が前提している存在論において衣服は皮膚（＝身体）と同一視されており、衣服の対象性／主体性が考慮されていないことである。また衣服には「裏」と「表」が存在し、前者は自己と、後者は他者と向き合う面であることも想定されておらず、その両面性が衣服という問題系を複雑化している。だからこそ、衣服を単に「皮膚」として捉えるべきではない。

そもそも「ファッション」は近代以降（十九世紀後半〜）、ジャン＝リュック・ナンシー（「一九四〇〜二〇二一）の言葉で言うならばエコテクニー（技術-生物圏）時代に始まった現象である。同時期における衣服の芸術への接近は、未来派やシュルレアリスムなどの芸術運動のファッションや身体への関心に端を発するものである。さらに言えば、芸術家は布というメディウムへも関心を示していき、芸術の中での衣服は身体から切り離され自律した存在へ向かっていくことになる。

ナンシーは —— 彼の心臓移植の経験が物語るように —— 主体を含めた「多」の全てのオブジェクトに主体の地位を認めている。彼の「分有」の概念には「触れる」こと、「離れる」こと、そして「共に在る」ことの意味が含まれているが、これは衣服と身体の関係を表現する上で的確な語彙でもある。ナンシーの「分有」の概念を衣服と身体の関係性において考察するために、本発表では田中敦子の《電気服》（一九五六年）を主な分析対象とし、衣服を「意匠／装飾」と切り離し自律したオブジェクトとして考察する。田中の《電気服》はその後の平面作品へつながる礎となるものだが、電気の配線がむき出しであることから、身体を感電の可能性にさらす危険性を併せ持つ。本品は明らかに「皮膚」からは程遠い対象＝オブジェクトであり、田中の所属していた具体美術協会が重要視していた身体性も欠落している。しかし、《電気服》はオブジェクトでありながら自らが発光し、対峙する者の知覚経験へ向かうものである。

技術による管理の時代に衣服はその存在意義を失いかけているが、本来衣服は身体へ情動的に接触する主体である。本発表では《「電気服》の分析を通して衣服の対象性／主体性を確認し、既存の衣服研究が衣服を「衣服＝身体」という地位に留めていることから脱却し、「分有」可能で身体への影響を及ぼすことが可能な主体としての衣服と身体の関係、つまり「衣服–身体」という存在として、この総体を捉えることを試みる。